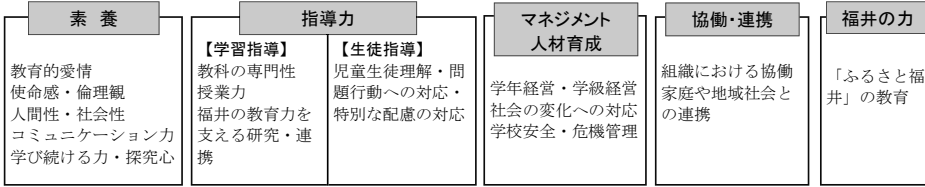


新たな教員研修のさらなる充実を目指して

－ライフステージに応じた研修の在り方を考える－

教職研修センター教員研修課

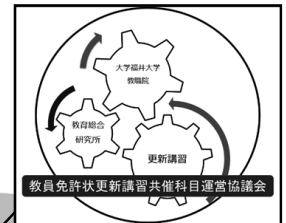
教員研修体系(基本研修・職務研修)と育成指標



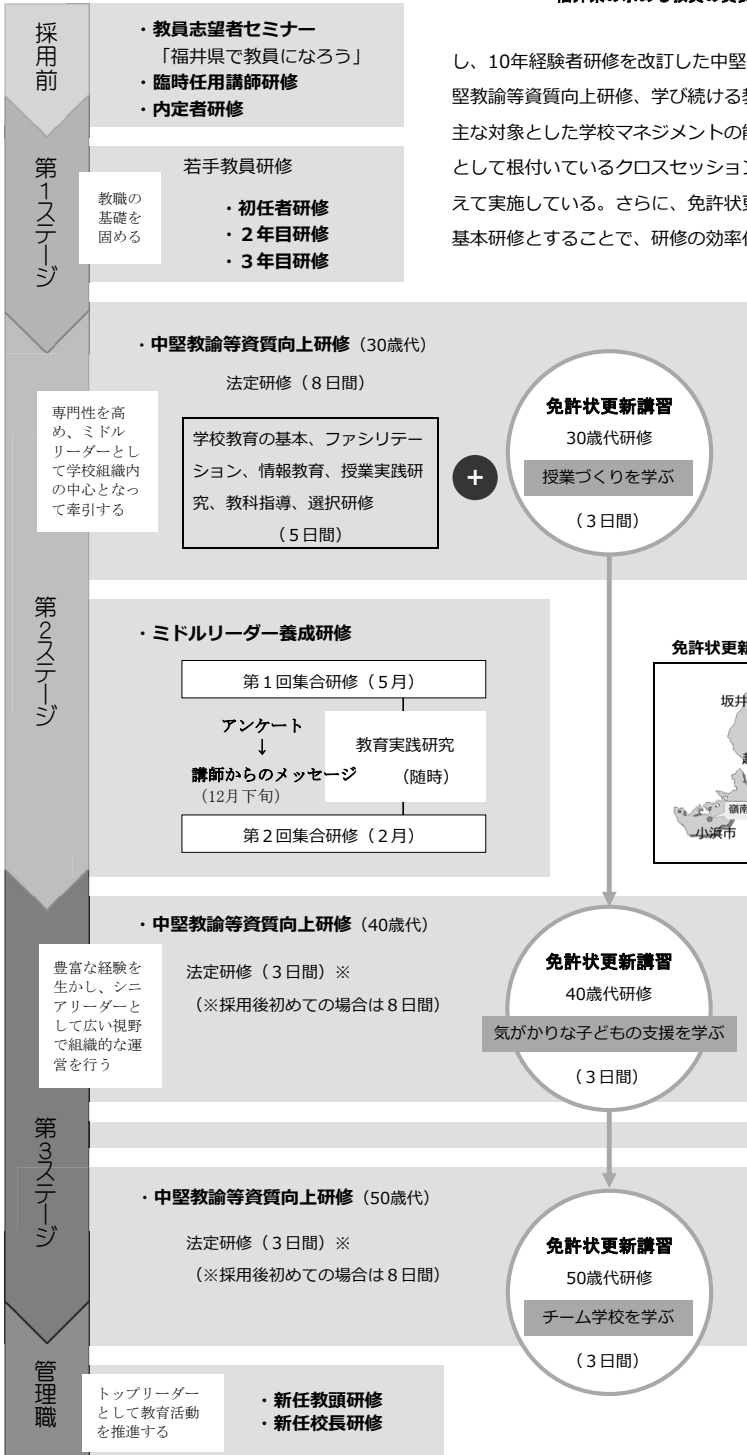
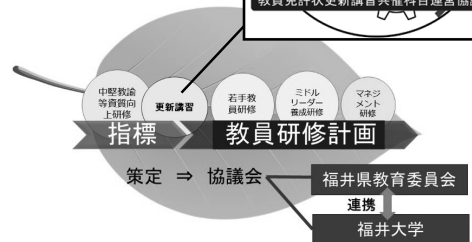
福井県の求める教員の資質能力

ふくいの教育の良さを継承しながら、新しい時代に対応できる教員を育てるために、福井県の目指す「学び続ける教員」の育成を目的とした教員研修全体の改善を図る中で、基本研修や職務研修を含む教員研修体系を大幅に見直した。今年度の新しい

教員研修体系では、5年経験者研修を廃止し、10年経験者研修を改訂した中堅教諭等資質向上研修、免許状更新講習に読み替え可能な世代ごとの中堅教諭等資質向上研修、学び続ける教師のキャリア形成を支えるミドルリーダー養成研修、40歳代教員を主な対象とした学校マネジメントの能力を高めるマネジメント研修を新設した。また、福井型の教員研修として根付いているクロスセッションは、これまでの成果と課題を踏まえて実施している。さらに、免許状更新講習に読み替え可能な研修を、基本研修とすることで、研修の効率化を図った。



指標・教員研修計画に基づく
研修と更新講習

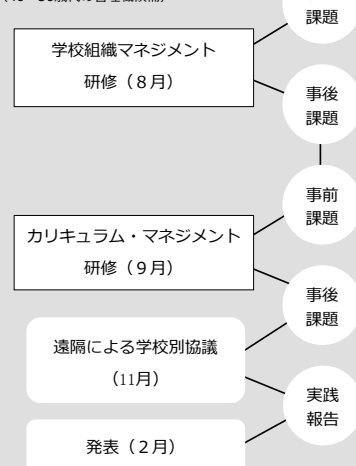


免許状更新講習 実施時期・実施場所・受講者数

実施時期	実施場所	受講者数
① 7月24～26日	教育総合研究所 (坂井市)	135名
② 8月8～10日	教育総合研究所 (坂井市)	90名
③ 8月16～18日	嶺南教育事務所 (小浜市)	46名
④ 8月23～25日	サンドーム福井 (越前市)	86名
⑤ 12月25～27日	教育総合研究所 (坂井市)	32名

・マネジメント研修

(40～50歳代の管理職候補)

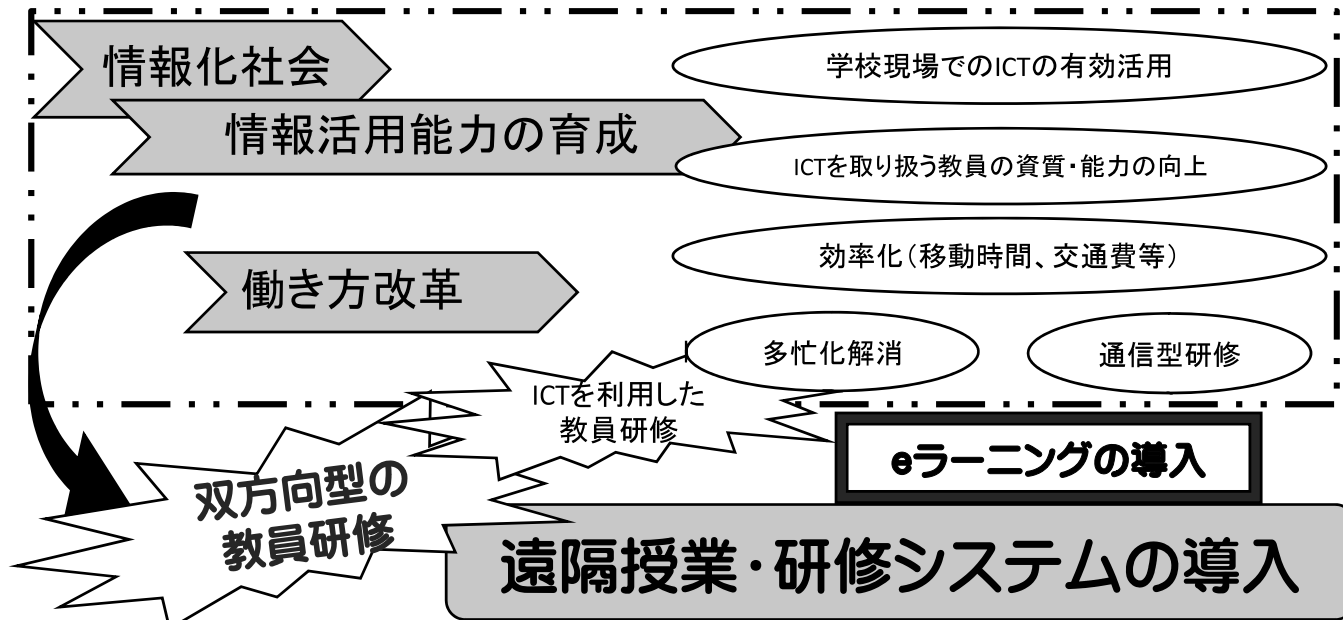


遠隔授業・研修システムを活用した教員研修の在り方を探る

— 次世代型教員研修への挑戦 —

教職研修センター 専門研修課

平成28年度、県内の全ての学校に導入された遠隔授業・研修システムは、平成29年度から本格的運用が始まった。その活用例を示し、そこから見えてきた成果や課題を検証し、今後の教員研修の在り方を探る。



遠隔授業・研修システムを活用した教科別研修一覧

日時	主会場	受信会場	講座名	受信者
7月7日 (金)	教育総合研究所	嶺南教育事務所	高書道	2名
7月10日 (月)	教育総合研究所	嶺南教育事務所	高英語	4名
7月21日 (金)	教育総合研究所	嶺南教育事務所	高数学	1名
8月3日 (木)	嶺南教育事務所	教育総合研究所	小社会	2名
9月15日 (金)	嶺南教育事務所	教育総合研究所	中数学	6名
9月27日 (水)	嶺南教育事務所	教育総合研究所	中英語	2名

遠隔授業・研修システムの整備
平成28年度に県内全ての公立学校や教育機関に整備！

同じ会場で受講しているような臨場感！

受講者の声

意見をこちらに求められたので、「参加している」感覚が高い

とても効果的。物理的なロスを減らせて便利！

スピーカーの性能を上げると、さらに良くなるかと

見えてきた今後の課題（教科別研修）

受講者の確保

運営方法（受講時間、資料準備、演習等）

配信方法・配信先を探る

その他、活用した例

マネジメント研修や臨時任用講師研修でも利用
→ 来年は初任者研修でも活用検討

活用促進と支援した例

学校での活用事例を収集し、収集内容を発信
→ 合同学習、生徒交流、海外との交流、特別講師授業、サイエンスラボ、教員研修、会議や打合せ

学校での活用促進

見えてきた成果と課題

- ・効率的に協議を進行できた⇒内容の精選
- ・研修に係るコストの抑制（時間、費用）
- ・接続の不具合をいかに解消するか

遠隔機器操作の支援と研修

- ・遠隔授業・研修システム掲示板の設置
- ・機器操作の支援を中心とした「通信型研修講座」作成
- ・授業配信、実験配信のサポートや訪問研修を実施

学校現場における学力調査の活用推進に向けて（Ⅱ）

－学力調査の活用に関する現状と課題－

教科研究センター 小中学校教科研究課 学力向上グループ

I 研究組織の変遷

1 小中学校教科研究科 学力向上グループ



福井型向上サイクルにより、県内小中学校の児童生徒の学力向上を目指す

2 平成28年度までの取組みと課題

○情報発信

全国学調

5月「速報」

8月「県分析資料」

SASA

1月「速報」

3月「報告書」「リフレット」

○「訪問研修」

学校内における学力向上に向けた「検証・改善サイクル」を回すことの重要性を伝える

(課題)

- ・研究所HPから配信している様々な資料の有効性や活用状況に関する調査が不十分であること
- ・1回限りではなく、継続的な支援を行う場合の研修内容について、研究不足であること
- ・答案の分析から活用まで学校全体で取り組む体制づくりや、具体的な授業改善に向けた教員全員の意識改革を促すこと

II 学力調査の活用推進に向けて（平成29年度取組み）

1 学力調査に関する「訪問研修」の工夫や改善

- ・綿密な事前打ち合わせによる効果的な研修
- ・学力調査を活用する意義の説明
- ・具体的な体験による実践的な研修
- ・学力調査を活用した授業改善例の紹介
- ・研修内容を振り返る時間の設定

2 「学校質問紙」を新設し、採点や調査結果の活用状況を調査

- ・小学校は全員で、中学校は教科で問題を解いたり、採点したりする割合が高い。
- ・全国学調も自校採点する学校が増えている。
- ・全員で分析結果を活用する割合が高い。

3 「訪問研修」後の変容を調査

- ・「検証・改善サイクル」が確立した。
- ・明確になった課題をもとに、全校の足並みがそろった指導を行っている。
→子どものチャレンジテスト合格率UP、自己肯定感UP
- ・各学校の課題解決に向け、小学校では学習ルールを工夫したり、中学校では定期テストに学力調査を反映したりする例も見られる。
- ・単なる平均正答率との比較でなく、問題から子どものつまずきを見る姿勢に変化した。
- ・授業改善にむけた市町ぐるみの情報交換の輪が広がった。

III 今後の方向性

1 成果と課題

(成果)

- ・学力調査や発信した情報の活用状況を調査するシステムを構築できた
- ・具体的な授業改善を支援するカリキュラムを設計できた
- ・訪問研修による「検証・改善サイクル」の浸透が調査結果より明らかになった

(課題)

学校質問紙の詳細分析による、情報発信の方法や内容の研究

2 次年度に向けて

- ・新学習指導要領が求める学力の調査研究
- ・小学校「外国語」先行実施に伴う学力調査の検討

到達目標を意識した指導改善と評価 —「福井県英語学習CAN-DOリスト」を基にして—

教科研究センター 小中学校教科研究課 英語教育グループ

「福井県英語学習CAN-DOリスト」作成のねらい

- ・小中高一貫した到達目標を作成し、校種間の連携を図る。
- ・各学校が自校版のCAN-DOリストを作成し、授業で活用する際の参考となる資料を作成する。

教師にとって

授業改善
評価改善

教師・生徒・保護者が
到達目標を共有

生徒にとって

明確な目標・学びの見通し
自分の立ち位置の確認
メタ認知力育成

作成資料

平成26年度	「福井県英語学習CAN-DOリスト」	・小中高を見通した到達目標 ・各学校でCAN-DOリストを作成する際の参照枠として活用
平成27年度	児童・生徒版「福井県英語学習CAN-DOリスト」	・学年修了時の到達目標
	「学年到達目標CAN-DOリスト」モデル	
	生徒版「学年到達目標CAN-DOリスト」モデル	・授業やパフォーマンステストの後に生徒が振り返りを行うための自己評価表
	「自己評価表」モデル	
平成28年度	「パフォーマンステスト自己評価表」モデル	・学年到達目標CAN-DOリストをもとに、単元別に設定した目標
	中学校版「自己評価表」モデル(修正)	
	中学校版「パフォーマンステスト自己評価表」モデル(修正)	
平成29年度	中学校版「単元別CAN-DOリスト」モデル	・入学時の到達度把握 ・定期的な到達目標の確認と、到達度の把握
	小学校版「単元別CAN-DOリスト」「パフォーマンス評価表」モデル	
	中学校版「CAN-DOチェックシート」モデル	
	『「コーパス」を活用した中学生のための英語表現集』発刊	

平成29年度小学校での研究実践と検証

研究協力校

勝山市の小学校1校

領域別目標を意識した授業実践とパフォーマンス評価の実施
5年生:話す(発表)、6年生:話す(やり取り)

パフォーマンス評価の分析と考察

- ・児童が必要な英語を必要な場面で使っているかをみるためのタスクや評価基準の設定、先生が客観的に評価することに難しさがあった。文部科学省の出す方向性を見極めながら、更なる研究が求められる。

平成29年度中学校での研究実践と検証

研究協力校

あわら市の中学校1校

生徒:中学入学時や学期末に自身の到達度を測ることで、課題を明確化
教師:生徒の課題を知り、指導に活用したり、授業改善に役立てる

成果

- ・「CAN-DOチェックシート」を用いて生徒と先生が到達目標を確認しながら定期的に自己評価をし、その結果を意識して先生が授業改善を行えば生徒の学習意欲が増す可能性があることが見えた。

課題

- ・短期間の検証ではなく、複数の先生方に授業改善に参加していただき、仮説の検証を継続する必要がある。

平成29年度『「コーパス」を活用した 中学生のための英語表現集』の発刊

研究協力校

県立中学校1校

研究協力校の生徒が書いた英作文を基にした例文、「基礎英語LEAD」から抽出した過去のNHK語学番組「基礎英語」で実際に放送した例文等を、CAN-DO指標とコーパスによる頻度情報を付加して、テーマ・トピック別に集約した表現集を発刊

活用場面

- ・英作文や発表等の表現活動の原稿作成の際に、表現を広げる、深める一助として活用する。

次年度へ向けて

- ・長期的なスパンでの検証:3年間の検証で生徒の学習意欲の変化を追跡する。
- ・複数の研究協力校で検証サンプル数を増やして、データの信憑性を高める。
- ・文科省の出す方向性を見極めながら小学校外国語に関する「パフォーマンス評価」の研究をする。
- ・到達目標を意識した語彙学習のストラテジーに関する研究をする。

小学校外国語活動の授業における英語絵本を活用した取組み

—授業の自然な流れを意識して—

教科研究センター 小中学校教科研究課 英語教育グループ

平成28年度 英語絵本の読み聞かせの研究

朝の時間に英語専科の担任の先生が行う読み聞かせの実践を通して、英語絵本1冊1冊について内容や読み方、適した学年等を検討した。

成果

読み聞かせの様々な手法、留意点が明らかになった。

「英語の絵本活用リスト」を作成した。

小学校の先生方からの要望

外国語活動の授業で、英語専科ではない担任の先生が行う、英語絵本を取り入れた実践例を知りたい

平成29年度 外国語活動の授業における英語絵本の活用法の研究

研究の目的

英語専科ではない先生でも負担を重くすることなく、外国語活動の授業をコミュニケーションの場にするための一つ的手段として、英語絵本の効果的な活用法を探る。

研究協力校における実践・検証

- ・研究員が、英語専科ではない担任の先生と共に、絵本を使った外国語活動の授業案を、自然な流れになるように工夫して作成
- ・担任の先生による5年生、6年生の授業実践
- ・研究員が、授業を観察、記録し、絵本の効果を検証

坂井市内
小学校
1校
5、6年
各1クラス

授業で絵本を活用したことによる成果

担任の先生が授業で英語を使用するきっかけになった。

絵本が外国語活動の授業をコミュニケーションの場にする一つ的手段になった。

児童が、絵を手がかりにして、英語が分かる実感をもつことができた。

授業で英語絵本を活用する際の課題

単元に合う絵本探し

授業の自然な流れ

先生の英語力向上

次年度へ向けて

・教科化が先行実施される小学校外国語の授業づくりや学習評価の研究

実験・観察を通して科学的な見方・考え方を磨く理科教育の研究

－課題解決力や探究力を育てる理科教育を目指して－

教科研究センター 理科教育課

理科教育課の活動

- ・学校に対する理科の実験支援
- ・高校生に対する理科の実験・研究支援
- ・福井県の理科教員のスキルアップ支援

具体的な取組み

- ・理科実験配信
- ・東大・京大の研究者に学ぶ実験講座
- ・アドバンス実験講座
- ・理科教員研修

理科実験配信

遠隔授業システムを用いた理科実験配信の実施と観察・実験について、サポートの方策を研究

(1) 特徴

- ① 双方向通信でサイエンスラボから学校へ理科実験配信
- ② 理科教育に効果的なコンテンツを開発
- ③ 学校現場での利便性を高めるための運用方法を工夫

(2) 実験内容

- ① 中学校15種類、高校20種類の実験を提供
- ② 教員の要望により新たな実験を開発

(3) 実績

43校 (1,184名) 小学校も試験的に配信

	坂井 地区	福井 地区	奥越 地区	鯖丹 地区	嶺南 地区	県立 国立	合計
小学校	4	0	0	0	0	0	4
中学校	9	4	2	7	3	3	28
高校	0	6	2	2	1	—	11

理科教員研修

科学的思考力や探究能力を高めるための指導法について、専門家の指導を仰ぎながら研究

(1) 観察・実験を主体とした先進的な授業開発と高校物理教育研修

講師 川角 博 特別研究員

(NHK物理基礎講座講師)

(2) 東京学芸大学高度理科教育支援センターと連携した高度な内容の高校化学、高校生物研修

実験講座、実験・研究支援

先端的実験に取り組むことができる「サイエンスラボ」の運営

(1) サイエンスラボを使用した生徒向け実験講座を開講 (アドバンス実験講座)

対象 希望する高校生

参加者 48人

日程 物理、化学、生物の各分野で年間5回

内容 物理、化学、生物の3分野で先端的な実験を生徒が体験する

(2) 大学の研究者から生徒が直接学ぶ講座を開講 (東大・京大の研究者に学ぶ実験講座)

① 東大講座

対象 中高生 (講演会を同時開催、教員を中心に一般へ開放)

参加者数 実習15人 (講演会120人)

日程 7月下旬の3日間

内容 缶サットの講義と実習

② 京大講座 参加者数

対象 中高生 (教員研修を同時開催)

参加者数 42人 (教員研修12人)

日程 9月下旬 半日

内容 iPS細胞に関する実験教室

成果

- ・実験配信において児童・生徒の学習意欲向上、理解促進、双方向による学びの深まり
- ・アドバンス実験講座における課題解決的な学びや探究活動の体験による探究意欲の向上
- ・東大・京大の研究者による実験・実習講座を受講した中学生や高校生の探究意欲の向上
- ・理科教員研修に参加した高校教員の授業力向上に向けた意欲の高まり

平成30年度に向けた課題

- ・実験配信拡大のための小・中・高校に向けた具体的方策の実施
- ・実験配信、実験講座充実のための新たな実験指導案の構築
- ・サイエンスラボを核としたネットワークの形成

新しい大学入試を突破する力を育てる学力向上策の研究

— 時代が求める学力育成に向けた意識改革を目指して —

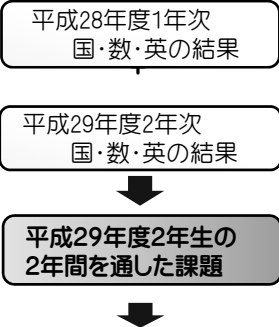
教科研究センター 高校教科研究課

福井県到達度確認テスト実施 平成28年度～

目的：生徒の学習到達度を測定し、定着が不十分な箇所を明確化し、学力向上に活用できる情報を提供すること

対象：県立高校普通科 1年生全員、2年生全員、3年生希望者

〈平成28年度、29年度実施状況〉



名称	解答方式	実施時期	教科・科目
1年マーク	マークシート	H30 1月 H29 1月	国語、数学Ⅰ、英語
2年マーク①	マークシート	H29 9月 H28 7月	国語、数学Ⅰ・数学ⅠA、英語
2年マーク②	マークシート	H30 1月 H29 1月	国語、数学Ⅰ・数学ⅠA、数学Ⅱ、英語、 世界史B、日本史B、地理B、 物理基礎、化学基礎、生物基礎、物理、化学、 生物
3年記述	記述	H29 8月 H28 8月	文系：国語、文系数学、英語 理系：理系数学、英語、物理、化学

教科	教科別課題	3教科に共通する課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ●語彙、古典常識、漢文句法など基礎知識の定着 ●読解(俯瞰的に捉える・論理展開を丁寧に読む) 	<ul style="list-style-type: none"> ★ 基礎的な知識の定着、理解 ★ 問題の内容を整理し、論理の展開を抑えながら全体を正しく把握すること ★ 把握した内容を周辺知識と関連付けて吟味すること <p>「SASA2016 結果分析と指導改善(小・中学校)」 でも同様の指摘</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 複数の資料から必要な情報を素早く正確によみとり、読み取ったことを関連づけて書き表すことに課題がある ◆ 理由の説明や答えに至る過程を、条件をふまえて論理的に、自分の考えを記述することに課題がある
数学	<ul style="list-style-type: none"> ●式変形の手順に対する理解 ●定理の意味理解と応用 	
英語	<ul style="list-style-type: none"> ●正しい発音、アクセントの定着 ●文法・語法に対する知識と理解 ●文章や情報の整理と吟味 	

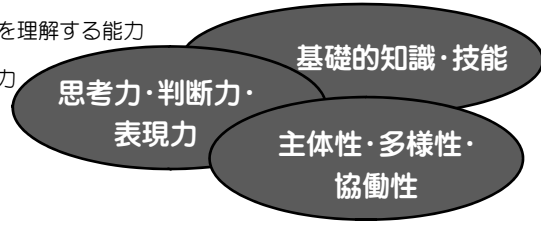
「大学入学共通テスト」の概要

○各教科・科目の特質に応じ、知識・技能を十分有しているかの評価も行いつつ、思考力・判断力・表現力を中心に評価する。

- ➡ 記述式問題を国語・数学で導入
- ➡ マークシート式問題も、思考力・判断力・表現力を一層重視して作問
- ➡ 英語は民間資格・検定試験を導入し、「読む」「聞く」の2技能から「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能評価へ変更

「大学入学共通テスト」が求める資質・能力 平成29年11月実施 試行テストの出題傾向から

- 国語 複数のテキストを比較したり、関連づけたりして、考えをまとめて表現する能力
他者の考えから自分の考えを修正したり、補強したりする能力
- 数学 有用な情報をまとめる読解能力
的確に数学的情報を処理する能力
- 日本史 情報と知識を活用し、歴史的事象の意味や意義、因果関係を理解する能力
- 世界史 基礎的な歴史的知識をもとに歴史的事項を探究する能力
- 地理 複数の資料から必要な情報を組み合わせて思考・判断する能力
- 現代社会 事象について多角的・多面的に考察する能力
- 物理 実験計画を立案する能力
- 化学 有用な情報をまとめる読解能力/実験計画を立案する能力
- 生物 実験内容について論理的に考察する能力
- 地学 実験・観察にもとづいて現象を理解する能力



〈これから必要になること〉

- ① 小学校・中学校・高校、12年間を通じた連携 …知識・技能の体系化 無駄のない接続
- ② 教科の枠を越えた視点 …教科間の連携 言語技術の基礎訓練で思考力・判断力・表現力UP!
- ③ 言語活動の更なる充実 …ICTの有効活用で時間の捻出 議論を生む手法の導入

ふるさと教育の「全体計画モデル」作成に向けて

—小学校から高等学校までの継続的なふるさと教育を目指して—

教科研究センター
新教育課題研究課

Ⅰ はじめに

- 1 ふるさと教育の充実が求められる背景
 - ・日本の人口減少と東京圏への人口集中
 - ・福井県の人口減少と人口流出
- 2 福井県が目指すふるさと教育
 - ・子どもたちが夢や目標を明確にして
ふるさと福井の将来を考える教育の推進
 - ・人とのつながりを重視し、お互いを尊重
する心を育てる教育の充実

Ⅱ 小学校におけるふるさと教育

- 1 ふるさと教育の現状
 - ・社会科 「きょう土の生活」、市町独自教材
 - ・道徳教育 「福井県版 心のノート」
 - ・国語 白川文字学教材
「古典音読・暗唱ノート」
 - ・総合的な学習の時間、特別活動
- 2 今後期待されること
 - ・社会に開かれた教育課程とカリキュラムマ
ネジメント

Ⅲ 中学校におけるふるさと教育

- 1 ふるさと教育の現状
 - ・社会科 市町独自教材
「ふるさと福井の先人 100 人」
 - ・道徳教育 「ふくい希望」
 - ・国語 「古典音読・暗唱ノート」
 - ・総合的な学習の時間、特別活動
- 2 「高志学」について
 - ・「ふるさと教育プログラム」、「キャリア教育
プログラム」、「課題探求プログラム」
- 3 今後期待されること
 - ・社会に開かれた教育課程とカリキュラムマ
ネジメント

Ⅳ 高等学校におけるふるさと教育

- 1 ふるさと教育の現状
 - ・「ふるさと福井の先人 100 人」
 - ・「私のしあわせ ライフプラン」
 - ・ふるさと先生による特別授業
- 2 課題解決型学習
 - ・ふるさと教育のテーマ設定
 - ・SGH指定校（高志高校）の取組
- 3 今後期待されること
 - ・「ふるさと教育」、「キャリア教育」、「主体
的な学び」、「主権者教育」の連携

Ⅴ 今後のふるさと教育の在り方

- 小・中・高等学校の継続的なふるさと教育の必要性
- 高等学校のふるさと教育への期待
 - ・「福井県」に関するふるさと教育の充実
 - ・キャリア教育の充実
- 福井県教育総合研究所の取組
 - ・ふるさと教育の「全体計画モデル」の作成・提案
 - ・ふるさと教材のデータベース作成
 - ・ふるさと教材を活用したワークシート等の作成

探究的な学習における資質・能力の育成と評価の在り方

— 県内の先行実施校の実態調査から見てきたもの —

先端教育研究センター

教科研究センター 新教育課題研究課

I 探究的な学習の意義と背景

- 1 資質・能力の育成とアクティブ・ラーニング
 - ・新しい時代に必要となる資質・能力
- 2 探究的な学習とアクティブ・ラーニング
 - ・探究のプロセス
- 3 探究的な学習と高等学校教育
 - ・新設される探究科目
- 4 「総合的な学習（探究）の時間」の重要性
- 5 今回のアプローチ
 - ・II～V章の概略

II 先行実施校の実態調査

- 1 事前アンケート
 - ・SSH、SGH、SPH、OECD-ISBNの各指定校7校を対象
- 2 訪問聞き取り
 - ・運営組織 ・先進校視察 ・教員間の共通理解
 - ・生徒の研究内容の発表機会
 - ・外部組織等との交流
 - ・生徒のモチベーションと変化
 - ・ループリックによる評価、ポートフォリオ作成
 - ・アドバイスと課題

III 探究的な学習における課題の設定について

- 1 「総合的な探究の時間」のねらい
 - ・次期学習指導要領
- 2 「総合的な探究の時間」のねらいをふまえた効果的な探究活動のプロセスの編成
- 3 探究的な学習における課題の設定について
 - ・課題を設定する際に大切なポイント
 - ・課題設定の際の指導事例

IV 探究的な学習における資質・能力の評価

- 探究的な学習における資質・能力の評価について先行研究の概要
- 「真正の評価」論に基づく資質・能力の評価
 - ・新しい評価の方法（パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価）
 - ・近年の学校現場における評価の研究
 - ・教員研修

V 評価学習会の実施

- 1 総合的な学習の時間における評価について
- 2 事前学習会
 - ・評価学習会に向けて（計2回）
- 3 評価学習会
 - ・モデレーション
- 4 評価学習会の成果と見てきた課題
 - （成果）モデレーションの重要性を認識
学習評価に関する力量形成のための研修
 - （課題）探究のプロセスの評価をどうするか
学校現場での実践が困難
育成したい資質・能力についての議論

VI おわりに

- 成果と課題
 - （成果）
探究的な学習の実施、評価については先進校の事例を学ぶことが効果的
 - （課題）
教員間の共通理解の醸成
評価方法の開発
- 次年度に向けて
 - ・学習過程の評価についての研究
 - ・体制づくりへの支援

高校数学における授業改善の取組み

－ 生徒の主体性を育み、深い学びを実現する授業を目指して －

教科研究センター 数学科

H28年度の成果と課題

成果

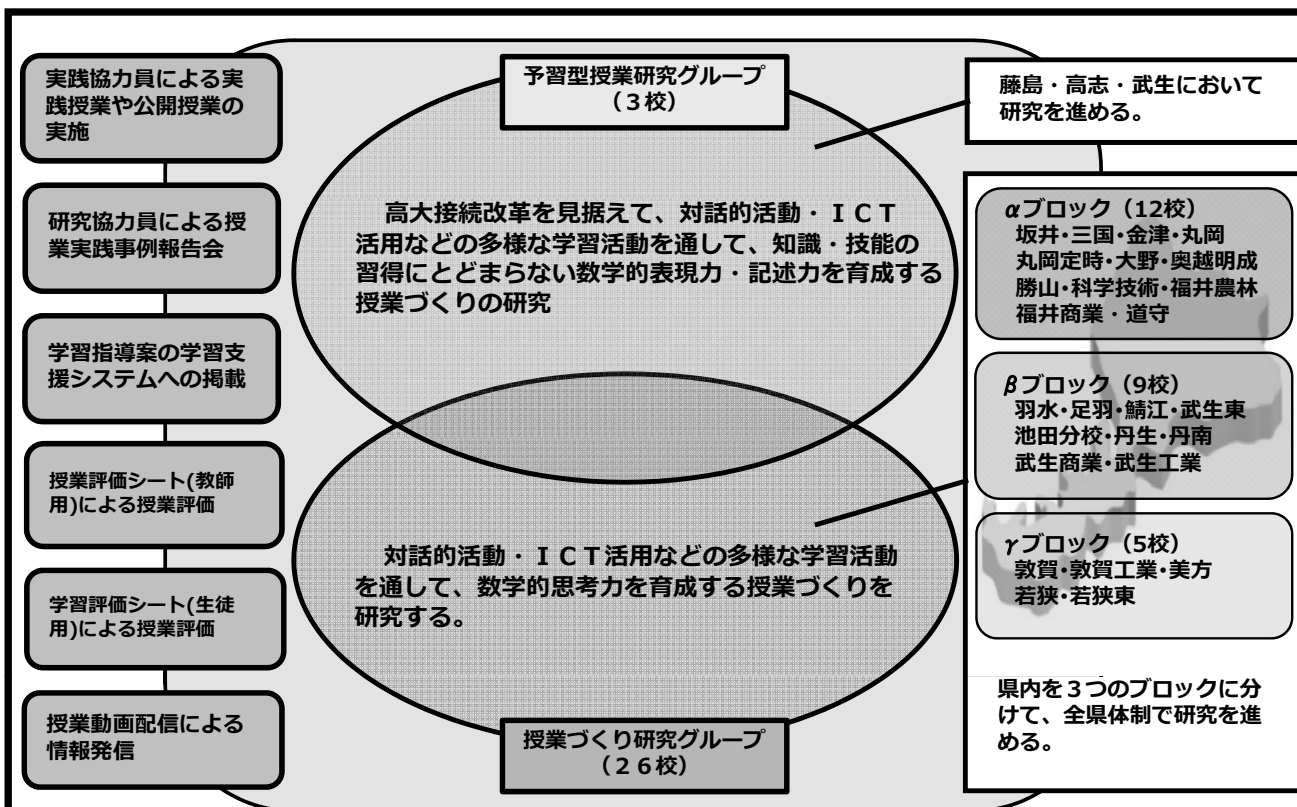
- (1) 数学教員が授業を公開し合い、授業研究をすることにより、授業改善に対する意識改革が進んだ。
- (2) 研究協力員への授業訪問を実施し、参考にすべき指導上のポイントを数学ユニット通信として発信した。
- (3) 3年間の歩みを検証し、授業改善事例とともに報告書にまとめた。

課題

- (1) 現状の年1回程度の授業訪問では、継続性がなく、十分な授業改善とはなっていない。
- (2) 手応えや肌感覚に頼った授業づくりだけではなく、根拠に基づく授業づくり研究を行うことが課題である。

H29年度の取組み

研究グループ・ブロック体制は、H28年度の体制を引き継ぐ



- 実践協力員との学校訪問や遠隔通信システムによる授業づくりサイクルの導入
- 授業評価シート(教師用)・学習評価シート(生徒用)による授業の振り返り

拡大から深化へ

実践協力員

学習指導案を立案し、その学習指導案を教育総合研究所と検討協議して、授業を実践する研究協力員のこと

授業づくりサイクル

「実践協力員による学習指導案の立案→学習指導案の検討と協議→実践協力員による授業→授業評価・学習評価シートで授業を振り返り検証し、次の学習指導案を立案する」サイクルのこと

授業動画

実践協力員の授業に解説やコメントをつけた動画のことで、授業動画には、30秒版と10分版の2種類がある

国語科における言語技術の習得、論理的表現力の育成 および読書指導に関する研究

教科研究センター 国語科

研究の背景

- 全国学力・学習状況調査にみられる継続的課題
 - ・適切な根拠に基づいて説明すること
 - ・自ら進んで読書すること
- 福井県の小学校6年生の英語教科化(H30～)

国語科における、論理的なコミュニケーション能力を育成するための言語技術教育の充実

が求められている

研究の概要

実生活で生きて働く国語の能力の習得を目指し、国語の授業に導入可能な取組みについて研究
生きて働く国語の能力…説明、描写、要約等の言語技術や論理的表現力等のこと

(1)国語教育研究に係る公開授業・研究会

- ・平成30年1月11日(木)実施
- ・永平寺町吉野小学校2年生対象
- ・授業者・講師
つくば言語技術教育研究所 所長 三森 ゆりか 氏
(国語教育研究アドバイザー)
- ・参加者 59名
県内小学校教員37名、地元中学校教員4名、
教育委員会関係者18名

(3)聖ウルスラ学院英智小・中学校

- 「第13回英智公開研究会」参加
- ・文科省の教育課程研究指定校(H29・30)
- ・研究主題「論理的思考に基づくクリティカルなものの見方・考え方を鍛える教育実践
- ・「国語・言語技術科」として、国語科のカリキュラムを言語技術教育で実践

(2)永平寺町吉野小学校との協働研究

- ・ねらい
研究協力校の先生方の実践を通して、小学生の書く力の育成や、論理的に自分の考えを表現するための言語技術の習得等を目的とした、国語の授業に導入可能な取組みについて研究を進め、効果を検証
- ・研究主任が担任する2年生の学級を対象として実践
- ・教材 6月「スイミー」 10月「お手紙」
11月「しかけカードの作り方」

(4)松岡中学校区小中学校授業づくり若手研究サークル活動

- ・若手教員の力量形成および小中学校連携の視点から、書く力の継続的な育成や論理的に自分の考えを表現するための言語技術の習得等、国語の授業に導入可能な取組みについて松岡中学校区単位で研究
- ・年4回実施
- ・メンバー 9名
(松岡中2名、吉野小2名、松岡小2名、御陵小1名、
所員2名)
- ・つくば言語技術教育研究所の教員対象研修参加

訪問研修を通じた言語技術の紹介

- ・平成29年8月29日 坂井市内小学校にて実施
- ・「表現力の育成」をテーマとした研修で「問答ゲーム」を紹介

(5)つくば言語技術教育研究所の教員対象研修「基礎1」

- 参加
- ・言語技術教育の概要について研修
- ・「問答ゲーム」「再話」は授業に取り入れやすい

「問答ゲーム」とは

テーマや質問の内容に沿って、互いの意見を交換し、対話しながら考えを掘り下げていく、議論の基礎訓練

- ・答え方:主語を入れた主張、根拠、まとめの話し型 「私は～です。なぜなら～からです。だから私は～です。」
- ・質問の仕方:「6W1H」を手がかりにたたみかける。

今年度の研究の成果と課題

- 成果
 - ・根拠をもとに考えを話したり書いたりするためのトレーニング方法「問答ゲーム」を紹介
 - ・「6W1H」、順序(大きな情報から詳細な情報へ)等、発問のときに気を付けるポイントを提案
 - ・教材「しかけカードの作り方」を言語技術の手法で実践する指導略案作成と授業実践報告
- 課題
 - ・言語技術教育の手法を具体的な授業実践に取り入れる方法の研究が不十分
 - ・語彙力向上につながる読書指導についての研究が不十分

➡ 言語技術教育普及の方法、読書指導の方法について、次年度に研究

専門家の協働によるチーム支援の在り方

教育相談センター チーム支援研究ユニット

研究ユニットの3か年計画

(H29)

(H30)

(H31)

教育相談センター
のチーム化

学校の教育
相談体制の
チーム化

市町の教育
相談体制の
チーム化

学校サポートチーム(教員・心理・福祉)の設置

SC, SSW

教育相談
コーディネーター

ケース会議

いじめ・不登校
の背景・要因
の複雑化

3機能のスキルアップ

3つのフェーズ

情報収集

情報収集
見立て
手立て

初動アセスメント

段階ごとの合意

ファシリテーション

「チーム学校」の要
としての役割を期待

効率性の向上

情報収集
アセスメント
プランニング
の幅を広げる

学校危機に対応するための緊急支援

チームによる情報管理のルール

学校サポートプログラム活用事例集

—学校の課題に対応する、小学校におけるソーシャルスキル、中学校におけるピア・サポートを中心とした実践事例—

教育相談センター 学級経営研究ユニット

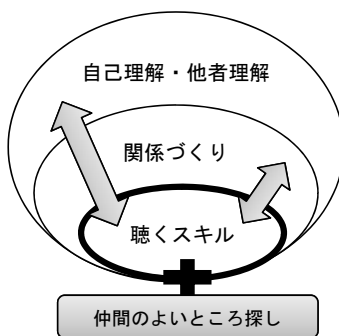
実践研究：平成28年度から県内の小・中学校に「突破力育成！学校サポートプログラム」として、「福井県版学級経営プログラム」を提供している。今年度は、学校の課題に応じた「学校サポートプログラム」の活用事例として、10の実践事例を紹介する。

小学校：3事例

- 1 良好な人間関係を築くための高学年での取組みとして
- 2 人間関係が固定しがちな小規模校での取組みとして
- 3 温かく豊かな人間関係を築くための学校全体での取組みとして

〈小学校版学級経営プログラム〉

回数	内容
1	上手な聴き方①
2	あたたかい言葉がけ「誘う編」
3	よいところさがし
4	相手の気持ちを考えた言葉がけ
5	上手な聴き方②
6	あたたかい言葉がけ「褒める編」
7	気持ちを周りの人に伝えよう
8	力を合わせて
9	上手な断り方



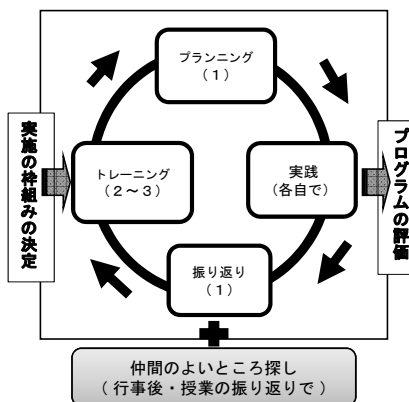
このプログラムでは、月1回の頻度で学習を行う。最も重要なスキルは「聴くスキルである」と考え、全学年で、まず学習し、定着を図る。次に、関係づくりへ、さらには自己理解・他者理解へと発展させていく形が基本形。学級の状態に応じて、学習するスキルを選ぶことが重要。継続して実践することが効果を上げるために最も重要である。

中学校：7事例

- 4 互いを認め合える関係を作る取組みとして
- 5 学校サポートプログラム実践2年目の取組みとして
- 6 若手教員サポートの取組みとして
- 7 人間関係づくりを通じたトラブルの未然防止の取組みとして
- 8 国立教育政策研究所指定「魅力ある学校づくり」調査研究事業での学級づくりの取組みとして
- 9 研究協力者を中心とした若手教員の学級づくりサポートの取組みとして
- 10 「音楽でピア・サポート」～授業や学校行事を生かした学級づくりの取組みとして～

〈中学校版学級経営プログラム〉

回数	活動名
1	ジョハリの窓 みんなってすごい！自分もすごい！
2	心地よい聴き方について考えよう
3	気持ちを読もう！
4	気持ちのよい話し方をしよう
5	上手な断り方 うわさ話への対処法
6	悪いのだ～れ
7	ピア・サポ活動をプランニングしよう
8	ピア・サポート実践
9	ピア・サポ活動を振り返ろう



このプログラムでは、仲間の支え合い活動を通して、思いやりのある子どもたちを育て、思いやりのある学校風土をつくることを目指す。活動に必要なスキルトレーニングを行った上で、プランニング・実践・振り返りを行う。さまざまな行事等にピアサポート的な要素を取り入れることでスキルの幅が広がり、定着が図れ、かつ学級が望ましい状態に変化する。

次年度の方向性

- ・事前に学校から聞き取りを行い、アセスメントをもとに実践校を絞り、集中的に訪問する。
- ・本プログラムを有効に活用するために必要な研修を学校に提供していく。
- ・より効果的な学校支援のため、所員の力量向上に努める。

魅力ある博物館運営を目指して

— 博物館から本県教育の特色や魅力を全国に発信 —

教育博物館

教育博物館の理念

- ・高齢者から子どもまで、福井県の教育に親しみのもてる博物館
- ・本県ゆかりの教育の先人を紹介し、受け継がれる福井の教育に誇りのもてる展示
- ・昭和の教室を再現し、県民が懐かしい学校の思い出に触れ、愛着を深められる展示
- ・全国トップレベルの学力・体力を支える取り組みや、福井県独自の教育を紹介
- ・教科書や教具等、学校教育に関する資料を収集、整理、保管し、未来への教育遺産とする

教育博物館の役割／運営(これまでの取り組み)

○資料の収集・保管

- ・旧研究所収蔵資料
- ・休廃校など各学校寄贈寄託資料
- ・一般の方からの寄贈寄託資料
- ・購入貴重資料 など
- ※温湿度管理・燻蒸による管理

○資料に関する調査・研究

- ・各学校(休廃校含む)の教育資料に関する調査
- ・類似施設の視察
- ※H28～29で約120箇所訪問
- ・資料の研究と展示への反映
- ◇渡辺洪基に関する研究
- ◇芳賀矢一に関する研究
- ※特集展示や常設の更新に反映

○展示を含めた教育活動

- ・常設展示の更新
- ◇越葵文庫との連携(藩校資料の定期的な借用による更新)
- ◇資料購入や複製の作成による展示資料の充実化
- ◇テーマを設けた展示の工夫
- ・企画・特集展示
- ◇「校歌～描かれた風景と郷土の願い～」
- ◇「福井地震と学校」
- ◇「ふるさとに学ぼう～郷土教材からみるふるさと福井～」
- ・イベント運営
- ◇「歌って遊ぼう～唱歌・童謡を歌おう～」
- ◇「唱歌や童謡を歌おう with コカリナ」
- ◇「16mm 映画上映会」
- ・研修・視察を含む来館者への対応
- ※H29(4～12月)県内外から51団体来館職員による展示資料解説
- ワークシート・ガイド資料の作成

今後に向けて

○来館者の反応(アンケートの実施)

満足度調査(5段階評価=5:満足 4:やや満足 3:普通 2:やや不満 1:不満)
展示室A:4.3 B:4.2 C:4.5 D:4.4 E:4.4 (アンケート回答総数1,638)
→感想・要望にある意見を参考に、展示内容の充実化に努める

○運営委員会の開催

学識経験者、近隣小中学校長、利用者代表、類似施設職員、マスコミ関係者による構成
→利用者の立場に立った視点から利用促進についての助言を頂き、改善に努める